

# いじめの規範における共有信念の効果

岡野朱里

いじめが初めて社会問題として取り上げられたのは、1986年「中野富士見中学いじめ自殺事件」である。そこらいじめを「悪」として認識し、学校教育の問題を語る上で無視出来ない問題となった。いじめによる自殺をなくすために、学校側は解決策を出してきた。しかし「いじめを厳罰化する」や「道徳教育でいじめを予防」しようとする、被害者や加害者の心理ばかりに注目する対策であった。しかしいじめの行為には、「環境要因」すなわち「社会的要因」も関連してくるだろう。そのため本研究では、社会的要因について注目していく。萩上（2009）は学校のいじめには、「ノリ」があると主張している。

「ノリ」に合わない者は忌み嫌われてしまうため、集団に同調して「ノリ」の合わない友達を仲間外れにしたりする。教室内では「ノリ」といういじめの規範が存在している。本研究では、いじめの発生原因である社会規範が重要であると考え、社会心理学的なアプローチを行う。いじめの話とは直接的には関係ないが、いじめの社会規範の解明の中心的な議論となる研究として、社会心理学における文化心理学の研究を参考する。全員がある特定の信念を持っている。しかし全員が同じ信念を共有している訳ではない。ある信念が共有されているという信念を人々が持っている状態を「共通性」と呼ぶ。そして「他の人たちも協調性が大切だと思っている」という信念を人々が持っている状態を「共有性」と呼ぶ。この共有信念こそが社会規範の中核であると示している。共有性がいじめの規範にとって重要かどうかを本研究では検証した。そのため、3つのシナリオを用意し、場面想定法による質問紙実験を行った。場面想定法の質問紙では、3つのシナリオの状況で、「社会規範あり、共有信念あり」「社会規範あり、共有信念なし」「社会規範なし、共有信念なし」を用意した。その結果、全ての組み合わせから有意な差は見られなかった。そのため「社会規範」「共有信念」の両方が、いじめの生起には、影響を与えないことが示された。本研究の問題点として、社会的望ましさのバイアスが生じた事が挙げられる。社会的望ましさとは、回答者が他人から好意的に見られるように回答することである。そのため「いじめはしてはいけない行動」として、社会的に望ましいとされる行動を回答したと考えられる。こうした社会的望ましさを排除した実験計画が必要であろう。